

「逸脱経験」をめぐって：経験における「世界との関係」の射程

有源探, ジェラード

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻(現代表象論)：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1904680>

出版情報：教育基礎学研究. 1, pp.3-18, 2004-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



「逸脱経験」をめぐる

— 経験における「世界との関係」の射程 —

有源探 ジェラード

前書き

今日、「経験」に関する言及はよくなされるように見受けられる。多くの場合、ある経験をjして、あるいは経験を重ねて会得したものや理解したことを人間形成の重要な要因として、また世界との一層の関係性を促すものとして捉えてきた。未知の世界との直接な関わりによって、その世界を司る諸規則を理解するその営みは即ち、経験によって、世界と自分との間の関係を知り、世界に関する知識¹（経験知）を蓄積することである。

なるほど、経験は人間形成の重要な要因である。しかし、経験がもたらすものはその類の関係だけなのだろうか。経験が開く「世界との関係」とは対象の知識としての関係性だけなのか。本稿では、知識をもたらない経験、また、知識を逸脱する経験の可能性を論述し、そのような「逸脱経験」について考察するとともに、関係性の射程を広げることによって、経験による人間形成に別の視点を提示したい。

1 「逸脱経験」における未知なるものとの出遭い

冒頭に挙げたように、経験とは何より、経験をjする当人²と未だ知らない状況や未知なるものとの出遭いである。未知であるからこそそれを知ることができる。だが、その最終的な知識の獲得より、逸脱経験の視点として、その出遭いによって生じる関係に留意する。その過程をより詳しく論じるために、フランスの哲学者 J. Derrida の著作から着想を得て、経験と経験知の必然的な関連性とは別の視点から、経験概念の捉え方に注目したい。その解釈は著者自身が具体的に展開しているものより、筆者が解読において、見出せた解釈であり、いわば著者の議論の文脈に沿った独自の展開である。

著者は次のように述べる：「経験（*expérience*）とは、その名が指し示すように、貫通である。それは貫き通って、ある目的地に向かって旅をする。経験が続くための路がある、経験はその路を通ることができる、つまり経験は可能である」³。

著者は最初に、経験の語源に注目する。フランス語で、「経験」を意味する言葉である *expérience* はラテン語の *experior*（企てる、賭ける、冒険する / 知得する、習い覚える、

経験する)を経て、ギリシャ語の *ex-peírein* を語源とする。*ex-*という接頭語は外部を意味する。そして *peírein* は動詞の「貫く」を意味する。経験は「貫通すること」(*passer au travers*)として表される。即ち、「貫く」こととは貫通する、破って貫く、突き抜けることである。「突いた先が中を通り抜けて、反対側まで出る」⁴ことには内部を貫いて、越えることという意味合いもある。ここでは、経験が、内部(同一性、対象性、客観性、既知、日常の世界)を貫き、外部(異質性、共約不可能性、不確実性、内部秩序から逸脱する世界)へと出る過程として捉えられている。そして、その未知で異質な世界に、当人は旅をする。経験することは未知なるもの・状況との直接的な接触とその接触から生じる相互関係のことだと既に述べたが、上の文脈で言い換えれば、内部秩序の客観性からはみ出ている特異性、不確実性、予測不可能性、逸脱などとの出遭いが当人自身の同一性を貫通し、外部への旅に連れ出す⁵ことでもある。

まず、貫く、貫通することというのは経験の完結、あるいは目的であるよりも、むしろその過程である。「旅」、「路」としての経験は既知、秩序、規則、規範からの逸脱から始まる。異質性はその名の通り、同質的な内部には存在しない。内部において全ては了解と秩序で満たされている。異質性はその外部に属する。

次に、確実な内部を離れて、果てしなく広がっている未知の領域に足を踏み入れ、そのなかに無数ある路のひとつを辿り、目的地に向かって進む⁶。しかし、その目的地も外部にあるので、確実な位置を与えることができるならば、もはや未知の外部ではなく、内部になってしまう。そして逸脱ではなく、同質的な空間移動(「この路を通れば、あそこに辿り着く」という確実な結果)でしかなくなる。目的地はどこにあるかわからない、そもそもあるかどうかということさえ定かではない。外部での旅は冒険のようなものである。途中で様々な出遭いはするが、予めそれは何であるかわからない。

目的地(*destination*)について、Derrida は語らない。そこに到着したりすることはおそらく重要ではない。経験の中心点とは、旅を可能にする路が通れることにあって、路の先に辿り着くのではない。目的地が不確実であるわけは経験のなかにはないからである。目的地(終わり、完結)は経験にはない、正確には、「経験の場」という異質な世界にはない。対象として指し示し、「それは目的地だ」ということは不可能である。なぜなら、内部は確固たる境界をもち、「内部に属するもの」は有限数の対象の総体であるのに対して、外部は「内部に属するもの意外の全て」であるがゆえに無限であるからだ。その無限に「終点」などあれば、もはや無限ではないのであろう。したがって、経験には目的地があるとすれば、それは当人自身によって、終着点として決められなければならない。当人

「逸脱経験」をめぐる

が経験の場において「自分の」目的地として見出すことに他ならない。到着点を決めてはじめて経験を語ることができる。また、それを経験ということが出来る。なぜなら、その出来事を経験というために、それを振り返ってしかできないからである。当人は自分が見たことや感じたことを経験という名で語るために、それが過去のものとなり、終了しなければならない。経験が記憶になり経過したあとでしか経験という名で呼べない。外部へと貫き、「経験の場」に彷徨うとき、なにも語れない。即ち、経験そのものは語れない、伝えられないものである。それは二つの意味でいえることである。第一に、経験している状態を現在進行形では語れないこと、そして第二に、不確実性について確実に語ることとはできないがゆえに、経験した内容の記述は必然的に不完全な再現にすぎないということである。

それを経験として語るため、もう一度内部へと戻らなければならない（少し乱暴な比喻を使えば、未知の地域での旅を語るのに、出発点に帰らなければならないと同じように）。それら特異の関係や状況との接触を切断し、強制完了させ、自己同一性のうちに「ひとつの」経験にまとめなければならない。その結果として得るのは勿論、特異性の経験というよりも、その記憶と内部に還元された物語である。だが、その物語は内部を逸脱して、外部での旅を経てできたもので、不確実で、正当性の保証のない逸脱の経験の産物である。通常意味される「物語」の整合性をもたないから、その語りはむしろ、「逸話」である。それは経験そのものが終着点に到達したからではなく、異質性との関係を当人が断ったことによって起こりえたのである。

そして、その直接な出遭いとしての経験そのものから、当人が何かを具体的に獲得したとすれば、それは「経験の場」での出来事の残骸または痕跡としての逸話のみである。しかも、そのような経験のあと、当人は必ずしも「なるほど、分かった!」というわけではないし、即座に経験したことの知識を得るわけではない。その経験を語ることさえ難しい場合もあり、その出来事を白昼夢のように語ることしかできない。そして、内部からして意味のない、非常識極まりない、無用なこととして排斥される。

以後の議論では詳述するが、具体的にいえば、逸脱経験とは何か。それは、日常的な内部における意味了解を逸脱する、あるいは歪曲するような経験のことである。遊びの経験⁷はその一例である。遊びのひとつの成立条件としての日常的世界関係の意味変容と再編成は多くの研究で指摘されている⁸。遊び手が遊ぶときの世界との特異な関係が、遊ぶときにしか成立しない。その意味で不確実な関係で、内部では成立し得ない関係である。例えば、棒や箒を馬と見立てて跨るのが内部では成立しない。箒は箒であるゆえ、それは塵を掃くためのものであり、掃除用具である。それに跨って走り回るのは箒の意味と使用法

に反しており、「逸脱」行為である。そのことは遊び手も知っている。だが、遊び手がそのときに出遭ったのは内部での掃除用具の箒ではない、それは「異質的なもの」としての箒である。内部において何の関係もない「箒」と「馬」の間に特異な関係を見出した。ただ内部では正当な関係として見なされない関係としてあるだけで、ありえない関係ではない。馬と箒とを「乗用できるもの」という関係性において、箒を馬と見立てることはできた⁹。そして、遊び手が遊んだあと、その非日常的な経験を語れば、必然的に、支離滅裂な「逸話」になるに違いない。ほかに、その経験を語ったからといって、内部における箒に関する知識や馬に関する知識の獲得につながったとはいえない。知識を逸脱した経験で、「無駄な」、「無意味な」経験として見なされるだろう。だが、逸脱経験と同じように、遊びは目的をもたない、否むしろ、目的が遊び手によって決定されるのである。

もうひとつの例を挙げると、内部とは異なる知識をもった他者との出遭いでもある。所謂「異文化」との出遭いであるが、筆者は敢えてそのように呼ぶのを避ける。なぜなら、殆どの場合、「異文化」とは内部の基準において理解された異文化だからである。理解される異文化はもはや異文化ではない。現代では海外旅行は盛んになり、遠地についてでも、あそこでの人の生活の様子などを知る手段はたくさんある。殆どの旅行は計画的で、遠い地域の文化遺産や料理、祭り、風景を見に行くのは目的である。だが、行程に載っていないあの村に休憩したときの驚き、あるいは観光ガイドブックに載っていないあの小さな店に入ったときの戸惑いはときとして起こり得る。見ようとしなかった風景をみる、会おうとも思わなかった奇妙な他者に遭うことが目的でもなく、行程にもない。そのずれは「異質的なもの」に触れる機会を与える。ここでも、逸脱経験の非日常性が認められる。が、もうひとつの可能性として、その緊張関係に耐えられず、より「安全」であるバスのなかやガイドのそばに後退することもありうる。逸脱経験は必然的になされるものではない。当人は未知なるものとの接触からくる緊張関係に対して、抵抗し、排除することもできる。異質的なものとの偶然の接触はあくまでも、出遭いの可能性をほのめかすだけである。

勿論、逸脱経験はそのふたつの例に尽きるわけではない。そもそも逸脱経験の範囲などを規定することはできない。既述したように、異質性、外部との出遭いは逸脱経験であるゆえに、一定の類型に分かれて数え上げることはできない、括ることはできない無限の可能性を潜めている。

どんな場合でも、それらの異質なもの・状況の経験を内部秩序に強引に還元できるのも確かである。その場合、「緊張関係」は解明されなければ謎、解決すべき対立や不和関係として捉えられている。その不透明な関係は「問題」である。要するにその「逸脱」のそ

「逸脱経験」をめぐる

れこそが統制されるべきものとして現われる。緊張関係に満ちた、見知らぬ世界を知ることとは、共約可能、理解可能な世界にすることである。我々と世界との関係の知識の起源は経験にある。それは経験主義が唱えた言説である。以後の議論で、逸脱経験・逸話と経験主義における経験知との関係を詳述するが、その前に、経験主義による世界との関係の捉え方、そして経験知の形成過程を見る必要がある。なぜなら、もともと、経験は「未知なもの・状況との出遭い」であるから、如何に「未知」が経験を通じて「知」になるのかを明らかにしなければならないからである。

II 伝統的経験論における「関係性」の射程

人間形成において、一般的に、二つの形態の営みを見出だすことができる。この二つの営みとは知識の伝承と経験による会得である。一方は人から人への伝達であり、伝えられた知識は伝承者にとって保証され、確実であり、また正当性をもつ。そして、世界の諸事物に関する知識であるがゆえに、学習者はそれぞれの事物に直接に知識を得るのではなく、間接的に、伝承者の教えを介して事物と接するのである。また、知識の伝承において、学習内容の確実性のほか、伝承者の意図や計画性があるともいえる。ここでは、学習者を社会化し、文化化し、ある共同体の一員に形成する誘導的な働きがある。他方では、人とその生活環境との関係から会得する直接的な知識、第三者（伝承者）を介しない経験の過程がある。さらに、当人はその経験を通じて、会得した知識は誰かが意図的に用意した内容ではなく、当人自身がある状況・事物と接してから得たものである。なにも伝達されていないし、なにも計画されていない。時間軸においての、当人が出遭う様々な状況とその末に、少しずつ蓄積されていく経験知である。

教育学は人間形成に関わる学問であるがゆえに、それら二つの手法を駆使して営まれる。上の「知識の伝承」と「経験による会得」は、伝統的な教育学の用語で言い直せば、「系統主義」と「経験主義」に当たるものである。それらが長らく対立する教育方法として見なされてきたが、筆者は敢えて、その共通点に注目したい。その理由は以下のようなものである。即ち、その対立は人間の知識・世界認識の起源に関する対立であり、知識が最終的に獲得されるという点において、経験主義と系統主義とは大して変わらないからである。両論は「知識の起源とは何か」という根本的な問いを共有しており、異なるのはその問いに対する解答である。そして、経験主義は経験を知識・認識の起源とする立場である。知識の起源は経験であると断言したところで、無論、経験から知識しかでてこないことになる。知識は経験の必然的な到達点、または目的地になる。

経験主義、またはその分派であるプラグマティズムは一種の起源論 (foundationalisme) であることはその経験概念の捉え方から窺える。プラグマティズムとは「科学的知的概念の意味を確定するひとつの方法であるが、その方法とはある科学的知的概念の意味を確定するには、その概念の対象が我々の行動の上に実際にどんな結果を引き起こすのかを、あらゆる可能な経験的手続きによって確かめよ」とする方法である。尚、「実際の結果」とは、プラグマティズムの祖である Peirce によれば「いつも誰でも実験的に確かめることができる結果」¹⁰ (反復可能、検証可能な結果) である。だが、そもそも、経験的な手続きとはどのようなことかといえ、一般的な定義に参照すると経験とは「欧語の *empeiria* や *experience* や *Erfahrung* などの語根も「貫き」「通す」ことを意味するから一般的に、特定の行為者が行為 A とその結果たる知覚経験 E との因果過程 (A→E) を通り抜けたことによって得た知識を意味する。(…) 人間がその行為によって環境世界に働きかけ、その反応を見て、世界を経験的に知るとというのが、人間的世界理解の基本図式である。それら経験知を述語的記述知によって統合し、(…) そうした知識の当否や真偽もまた、再び人間が環境世界に照らして経験的に判定せざるを得ないことになる。」¹¹

ほかには、「一方、我々が現実という圧倒的な力のもとに置かれつつも、他方、それに能動的に働きかけ、それを我々の支配のもとに置こうとする、その相互作用の自覚は経験である。経験における現実と我々との間のこうした緊張関係の中から、我々の知識や理論が生まれる。哲学においては、経験の問題は知識論の問題である」¹²、ともいう。

その一般的な定義から、(欧語での) 経験の原義を「貫く」とするのは、第一節で述べたこととは共通するが、「貫く」ことの意義には大きく異なる。「貫き」「通す」ことはここで、因果過程を通り抜ける意味で、「終わり (目的) までやり抜く」、「一貫性をもたせる」こととして捉えられている。そして、その解釈の違いは経験概念の規定の違いを招くだろう。

定義にあるように、伝統的な経験概念の捉え方は専ら知識論に属する。そのような捉え方は以後の議論で述べるように、教育方法及び教育実践である経験主義的教育学にも影響を及ぼさないわけではない。主体の能動的な働きと世界の反応の因果関係の自覚を経て、経験は如何に知識にいたるか、如何に知識として統合されるかを追究するあまり、経験を客観知の囲いに閉じ込めた。よって、この文脈においては、経験は以下のように捉えられることとなる。

経験は主体と環境世界 (対象) の区別の上に成立つ。尚、主体の行為は経験の発端であると同時に、主体による因果関係の自覚と統合は経験の終着点である。

「逸脱経験」をめぐる

能動的な（＝行為）・受動的な（＝反応）諸作用の緊張関係を自己のうちに統合するとは即ち、緊張関係を調和関係に変える働きである（この意味で「統制」、または定義によれば「支配」である）。それは「貫く」ことであり、現実と我々との間の関係を知ることである。（予測不可能なものを予測可能なものに変えること、よって因果関係による関連づけは「計算・計画」、または「規則の創設」につながる）。

当人が経験を通じて会得した経験知は、伝承者の媒介なく本人自身がある状況・事物と接してから得たものであるにも関わらず、その知識の妥当性、真偽が結局、いつも誰もが確認できる事実でなければならない。（反復可能性、検証可能性の要請）

要するに、経験主義の関係性の射程とは知識体系における確実に整然とした関係、言い換えれば内部秩序において規則として見出された検証可能な諸関係のことに尽きる。「関係する」過程は（外部での）緊張関係を（内部の）調和関係に変える働きである。そのような経験の捉え方を「統合経験」と呼ぶことにする。

よって、統合経験とは人と世界の間を促す過程であることに留まらず、その関係の成立を知識の獲得（量）で計り、主体のうちに統合し、その知識の正当性（質）を評価するための装置である。この視点から見た人間形成としての経験とは、既存の社会的規範において、その社会特有の知識・技能を経験的に獲得することである。例えば、経験主義的教育学の方法としての共同生活の経験とは共同生活を営むための必要な知識を獲得し、既存の基準に達することである。また技能の経験とは特定の状況下、課題を遂行するための方法を経験的に習得することであり、また同じ課題を以前より効率的に（上手に）遂行するための方法を経験的に習得することである。両方において、それらの出来事との関係から習得された知識の達成度は評価できる、量的に、そして質的に。

ここでは、統合・完結こそが経験である。様々な出来事を「ひとつの」経験に関する知（経験知）へと統合する。そのような経験形式は専ら完結＝目的を重視する。そして、人間形成として、関係性を獲得することは「社会性」を獲得することに等しいではないか。社会性を獲得し、成長し、大人になるというような「計り得る」成長過程としての関係性である。それは確かに人間形成の一面である。知性を持った人間、社会性を持った人間としての形成過程である。

無論、そのような関係の成立は人間の社会的生活の基盤を成しており、知性を備えた存在としての人間たるゆえんである。そのような知の獲得は如何なる人間社会にもなされている。ほかの人間との接触、そして世界との接触を通じて、その社会の成員として必要な規則や技能を経験的に身に付けることがその社会の維持・存続のために求められる。その

ことを批判し、排斥するつもりは全くない。それは人間形成において不可欠な過程である。

筆者が抱いている疑念とはむしろ、「関係する」こととはそれだけなのか、ということである。「知識の起源とは何か」を問うあまり、経験主義は自らの解答の妥当性を検証するのに怠った。否むしろ、少なくとも、経験が世界に関する知識を導き得ることをその検証の充分条件とみなしてきた。だが、「経験がもたらすものとは何か」ということを、経験主義は問わない。なぜなら、経験主義の言説は経験を扱うのではなく、(定義にあるように) 知識について論じるからである。ところが、「経験がもたらすものとは何か」という問いは経験について論じる上での重要な視点であり、問われなければならないことである。その方向での研究は、経験主義によって知識の囲いに閉じ込められた経験を見直し、経験の全貌を明かすのであろう。「関係すること」、「関係の成立」とは規則としての関係、行為・反応の因果関係でしかないのか。人間は統一されされた唯一無二の世界、客観的な対象として捕捉できる世界としての「現実」にしか生きてないのか、あるいは生きるべきであろうか。その「現実」との関係の仕方さえ学べば、人間は人間になれるのか。

前節の議論を通じて、別様の関係の形を提示してきた。しかし、これで逸脱経験と統合経験は相容れない現象であって、別々の経験形態として結論づけるつもりはない。内部と外部の間の境界は絶え間なく変化し、個人、一定の社会や共同体、そして人類にとっても変動可能なものであり、また歴史とともに絶えず変動してきたのだ。その変動の方向性に関して、さまざまな視点で議論を進めることができる。

Ⅲ 逸脱経験の逸話と統合経験の経験知の関係について

既にみたように、統合経験は人が世界に対する新たな関係を結ぶことによって、緊張関係を秩序関係に変え、人間だけではなく、世界に対する関係図式も変えているのである。よって、ふたつの関係図式があるように見える。緊張関係と整然たる関係(知識、規則)である。統合経験は後者だけを経験と見なすに対して、逸脱経験では、前者を経験として捉え、後者をその痕跡としての逸話と捉える。逸話は外部での旅を経てできたもので、不確実で、正当性の保証のないものである。換言すれば、統合経験は世界における緊張関係を「解消すべき問題」として見なすことによって、経験主体の積極的な働きによって、問題解決という目的を設定する。したがって、経験の完結とは「問題」とされる緊張関係の征服である。一方、逸脱経験とは異質性との出遭いであるゆえ、その場合の関係を問題としない。よって、それを解決・征服する必要性(目的)もない。いつでも終わることができる、そして各々の終着点には正しいものと誤ったものがない。その意味では、両者の相

違とは「確実な目的設定」の有無にあるといえよう。

確実な目的設定をもった経験はいつも誰にでも、その結果を確認できる。そして、その正当性を認め、確実な知識としてほかの人と共有できる。しかし、共有されるのはそれに関する一定の規則であって、経験そのものではない。経験が知識をもたらし限りにおいてのみ共有できるといわざるを得ない。以下の例で具体的に説明しよう。同じ場面を見た二人の人物がいると想定する。A さんが見たことは B さんにはわからない、わかるのは、B さんが自分の目で見たことのみである。しかし、A さんは何を見たかといっているのは B さんの目では確認できる。そうして、B さんが見たことは A さんが見たといっていることと同じであれば、A さんの知覚的経験は B さんも共有したといえる。よって、経験の語りによってのみ経験の共有が可能である。しかし前に示したように、経験の語りが正当だと判定されれば（確認できれば）それは知識となる。しかしそれが確認できなければ、誤解や戯言として排除されるだろう。ここでは、経験と知識が離れがたく関連付けられている。

そのような経験形式は目的を重視する、そして、関係性を獲得することは「社会性」を獲得することであると既に述べた。社会性を獲得し、大人になるというような統制可能な成長過程としての関係性である。その「社会性」の獲得はいうまでもなく、教育によってなされるものである。だが、その営みに経験による知識を計画的に指導するようになったのは新しいものである。その一例として、経験主義の教育(科)学的应用、経験学習はよく知られている。

そのような経験学習の「知識生長過程」を論じた池田氏の論文¹³に、興味深い実践例が提示されてある。その例に基づいて、経験学習が成功する場面（池田氏の論）と逸脱経験につながる場面（筆者の論）を具体的に見てみよう。

まず、氏は「マーケットごっこ」たる経験学習の計画を子どもの作文を引用しながら、その進行を追う。三日間に及んだその計画のなかで、「くすり屋」になった「ぼく」と「山田君」に注目する。初日、担当の教諭から 3320 円と貯金帳、買い物帳、売上帳をもらい、そして薬局にいき、薬はなにから作るか、どの位の値段で売るか、調べた。また、自分たちの「くすり」をぬかやチョークや水に溶いた絵の具で作って、売った。

その記述に基づいて、池田氏は次のような論を展開する。

第一に、子どもの作文から窺うと、薬局で、ただ薬の値段と原料とを学んだだけであるように見えるが、それらを含めたさまざまなことを学んできた。例えば、薬品の陣列の仕方、貼ってある広告、薬剤師の様子などをも見てきたはずである。子どもがそこで見たの

は、いわば薬局というものの全体である。それを語ろうとすれば、語り得るし、潜在的に、語る可能性として、前言語的なものとしてある。

第二に、それらの事柄が、この子どもにとって薬局の意味を構成するようになる。正確に言えばこれらを記号の内容面として、また薬局という物理的な音や文字を記号の表現面として、両者をお互いに対応させるしかたを獲得するのである。この記号の表現と内容とを対応させる規則をコードと呼ぶ¹⁴。

そして、まだコード化されていない状況に直面し、それを解釈しようと試み、それによってコード自体をより一層分節的で、より広い範囲の状態を処理しうるものに変えていくことである。つまり、コードを増殖させることである。このとき、既有のコードは新しい状況の解釈の手がかりとして使われる。それは学習である、学習とはコードの増殖である。これは新たなコードを作り出す創造的な営みである。

なるほど、その通りである。子どもは教師による口頭の説明より、あるいは資料や映像への参照より多くのことを直接に経験して学んだのである。そんな池田氏の論述は系統学習と経験学習の論争のなか、特に経験学習の「這い回り」の非能率的な効果に対する批判に対して、経験学習の意義を評価するのに適切な論理的枠組を示そうとする。「経験主義教育は、狭い、意味の固定した命題や名辞を「知識」とみなすことに反対し、子どもの内の知識の成長を保証しようとする試みであるはずである。「知識」概念は言語的命題よりも広く、子どもの概念のあり方全体をとらえることを要求するものであるはずである」¹⁵と氏はいう。確かに、系統学習の「意味の固定した命題（の獲得）」に比べて、経験とは「濃密なテキストの獲得である」。即ち、経験において、その状況の知覚的、感覚的情報の「濃密度」が高いということである。その点に関して、池田氏は経験の重要な特徴を指摘する（展開に値する視点でさえあるが、紙幅の関係で、控えることにする）。ところが、次に「正確に言えば、〔経験とは〕記号を濃密なテキストとして解釈することを可能にするコードの生成である。「知識」とはコード全体をさすものである。」¹⁶とある。まさに記号が、濃密な経験状況に先立って存在するかのようだ。例えば、薬剤師に「薬剤師の記号」がどこかに記されている（経験状況からして、ただの人間にすぎない）、広告に「それは販売促進の広告だ」という記号が先験的に含まれてある（経験状況からして、ただの紙片にすぎない）ようである。

ところが、薬剤師の知覚に薬剤師の意味（記号）が含意されるはずはない。それより、その状況を既存の規範からして有意義な記号に区切り、「（正しく）」解釈することが氏のいう経験ではないか。その解釈がコードを生成し、知識として統合される。よって、経験

「逸脱経験」をめぐる

を「濃密な状況との接触」として捉えることで、氏の指摘に賛同するが、統合経験にしか機能し得ない経験の仕組みを論じることになることが欠陥である。経験主義の伝統にしたがって、経験が知識をもたらす過程を追究し、経験知の獲得という目的の前提から離れなかった。統合経験における記号を先験的なものにしたことで、子どもの知識の生長を保証し、評価可能なものにした。その仕組みを見た上で、続いて、そのような仕組みが破綻する場合を示したい。

取り上げられた経験学習の実例で、知識の面からでも、社会化の面からでも、子どもは多くのことを学んだ。そのような完璧な経験をした「ぼくと山田君」は間違いなく、先生に誉められるだろう。しかし、そのような「ごっこ」で、彼らはただ、「大人の世界のシミュレーション」の諸段階を計画通りに通過して、予測された目的に辿り着いただけではないか。ほかに、池田論では、「僕と山田君」が見たものは彼らが見るはずのものになってしまう。つまり、社会の「まともな大人」からみた薬局の風景である。なぜなら、まずそのごっこの設定は現実の薬局をできるだけ忠実に再現するようになされているからである（ごっこ遊びとは多くの要素において無縁である）。そして「ぼくと山田君」が実際の薬局営業をするかのように、売上帳なども用意されて、本物の紙幣が支給される。それに薬剤師に薬品の値段と原料に関する情報まで調べてくる。勿論、薬品だけは偽者である。その三日間、模擬店での活動を通じて、子どもは薬局の営業に関して、あるいは薬剤師の仕事に関して、なにか学んだかもしれないが、それは教師が意図したものだけである。子どもは教師のさせたい経験をし、その経験の知識（コード）を共有できた。しかし、「コード」は子どもから必然的に見出されるのではない。記号の表現面と内容面を対応させる規則も薬局の様子それ自体に包含されていない。子どもによるコードの獲得以前に、先験的にコードが存在している。コードの獲得とはただ、経験の目的である。辿り着くべき正解である。その意味で経験から規則を生み出すより、規則の経験、規範の経験といった方が正しいのではないか。

プラグマティズムは経験から知を得るよりも、既知を経験的に確かめることを重んじる方法であると述べた。知識の確認手段としての経験であるので、経験は知識の道具であり、ただ知識に正当性を付与する手段である。その方法は以上の議論で明らかにしたように、経験主義的教育学における経験学習に今でも使われている。

それは筆者が上の議論で「統合経験」と呼んだもののひとつの現われである。少なくとも、経験主義の文脈における「社会性としての関係性」をよく表す一例である。勿論、それだけではない。本稿では、「個人知」としての統合経験を扱わなかった。それは例えば、

一人の人間が経験を重ねて身に付けた「技」や「コツ」、職人の腕といったものなどである。なぜなら、その経験知は確かに、当人のうちに蓄積とともに統合されていて、ますます確実な知識になるが、その経験は誰にでも共有できないからである。経験主義の客観的知識の前提とは別の次元であるとみなす。

さて、そのような統合経験の過程は、如何に逸脱経験と交差できるか。池田氏の経験学習の場面設定を使って、架空の人物の「田中君」を想定する。田中君は「ぼくと山田君」とは別の「くすり屋」をやっている。しかし、全く同じ状況で、教師の期待を裏切って、わけのわからない逸脱経験をする。その過程は次のようである。

田中君は別の動機で「くすり屋」をやろうと思った¹⁷。店内に入ったことがないが、家の前で大きなケロリンの蛙の置物がおいてある店がある。母親から、ここが「くすり屋」だといわれた。毎日、その店の前を通って、面白いと思ってそれにしようと思った。その店を便宜上、「ぼく」が訪れたのと同店としよう。人形の置物は池田論によれば、正解である「販売促進の置物」として理解されるはずだが、田中君にとってそれはただ一体の面白い人形である。そして、課題としての薬局での情報収集に訪れて、なかに入って、彼がみたものをこのように語る。スーパーの飲料売り場のように、いろんな瓶がいっぱい並べてある。そして、店員は鼻にはくろがある白衣を着たおじさんである。薬の値段は高い、薬一箱の値段で、お菓子を五箱も買える、等等。

田中君は明らかに、同じ薬局の様子を直接に経験して、薬局の意味を「ぼく」とは異なった仕方で構成した。さて、どちらがその場面を正しく理解しただろうか。両者にとって、薬局の様子を詳しく調べるのは初めてで、未知なものであった。しかし、その経験から、池田氏の推論によれば、「ぼく」は薬局の商業面、医療相談面、技術面を正しく理解した。確かに田中君は薬局の経験から、支離滅裂なケロリン人形、ほくろ、お菓子と薬品との価格比の話しか得られなかった。しかし、それらの事実は田中君が捏造したわけではなく、誰にも確認できるものである。人形も、店員のほくろも、薬局の「全体」の一部である。彼はただ、記号の表現と内容とを既存のコードに反して対応させただけである。その変則的な関連付けは整然としたコードの世界了解から逸脱している。その経験の目的であるコード獲得まで辿り着かず、途中で別の路、外部へと出る路を進んだ。そして彼がそこでみたものは薬局に関する経験学習として無効である。

その類の経験の語りが知識になるために、その場にあった諸対象を一般化可能な仕方で記述しなければならない。即ち、対象を定義できるような形での記述が要請される。その

「逸脱経験」をめぐる

薬局に関する知識が全国のどんな薬局にでも対応する形で、薬局一般を統一するように、客観的に記述されなければならない。その定義を知れば、いつでも誰にでも、薬局とは何かを理解できる。「薬局とは～だ」あるいは否定の「～でない」の一般的な記述によって、薬局をひとつの対象として区切る。一方、田中君の逸話はそのような確実性をもたない。彼の描写は、彼が訪れた特異な薬局についてであって、彼だけが感じた人形の魅力や店員の顔の特徴は「薬局」を一般的に定義するのに不十分で、不適切である。その薬局は「薬局とは～だ」という定義を逸脱し、異質なものとして現われる。田中君は薬局を定義するより、その中に生じた関係性を述べる。例えば「それは～に見える」「それは～のようです」というが、その「それ」に関する対象的定義は不確実なままである。

学習の場としての教育現場において、そのような子どもが望ましくないこと、問題児として扱われがちであることは安易に理解できる。そのような逸脱を披露されては困る。

しかし、逸脱経験を別の場面で考えてみよう。第一節で取り上げた、内部とは異なる知識をもった他者との出遭いを思い出してもらいたい。ここで、アマゾンの熱帯雨林の奥地に棲む部族であるとしよう。コードを作り出す創造的な営みとしての学習にしたがえば、まだコード化されていないその状況を解釈するのに、既存のコードはその手がかりとして使われる。

しかし、そのようにして、19世紀の人類学者によって「解釈」された部族たちが結果的に、野蛮人や原始人と呼ばれ、Tylor が「社会進化論」たる差別装置を唱えたのは、それほど昔ではない。人間一般の定義における最下位に位置する原始人という解釈は当時、科学的で、客観的で、正当な論説であった。部族たちは、我々の知識や世界解釈の外にいる、未知で、異質的である。彼らを「我々の」世界解釈に強引に内包しないために、まずその安定した、確実なものを離れて、別の関係の仕方をその出遭いから経験する他ならない。既にできた、現代社会の完全に整備・管理されている「知の交通網」から降りて、路がないはずのところに路を見出す。田中君の薬局との出遭いも、どんな逸脱体験も、当人ひとりが歩んだ路である。その創造的な営みも、一般化できないからといって、人間を形成し、人間が世界へと開く試みとして、否定してよいのだろうか。

学習だけは新たなコードを作り出す創造的な営みであるわけではない。より広い視野で見れば、コード創出能力とは人間の概念操作能力の一面にすぎない。概念操作によって、例えば、概念体系を創り、その概念の間の関連や分節を増やし、統一したの世界了解図式を形成することはできる。しかし、概念操作によって、その体系を組替えることもできる。組替えの可能性は無限にあり、無限に新しい関連性を創造できる。学習とは別の世界関係

もある。そしてそれは学習と同じように必要、学習と同じように人間と世界との関係性を豊富にしてくれる活動である。

秩序を築いたのは人間である、不確実性や緊張関係を統制し、効率のよい、透き通った了解の世界を創った。そしてその安定した内部に安住した。見知らぬものを追究しながら、その秩序に内包した。だがそれで現代にいたって、その秩序から逸脱するものと如何に付き合うかという問題が頻発する。描いてきた秩序の世界の規則性では対応できないもの、予測可能の世界では予測できなかった出来事に直面する。それは秩序を逸脱したものとの関係を統制可能な関係としてしか見えなかったからではないだろうか。それは、統制しきれない不確実性との関係を普遍的秩序の視点から把握できないからではないだろうか。そのことは別の視点、別の可能性を探るように告げる警鐘である。E. Morin がいうように「確実なことは教えられるが、不確実性と如何に立ち向かうかということはいつも教えられていないままである、そしてそれは根本的な問題である」¹⁸。

一方、逸話を語るのもまた人間である。逸脱経験とその産物である逸話は人間と世界の関係の別のあり様である、別の可能性であるからして、普遍的とされてきた整然たる関係に潜む不確実性を暴く。内部秩序が忌避してきた、排除しようとしてきたその不確実性を。逸話は人間が世界に対して多岐的な関りをもちうることを示す、内部と外部とをつなげるものである、そして人間が自分の世界認識を変革し、開いていく可能性をほのめかす。そのことからして、知識の獲得による人間形成と並んで、逸脱の経験としての人間形成もある。それは世界との関係を、そして人間自身の地平を絶えず越えて、多様にしていくことであるが、その効果、その方法、その行方は勿論、予測したり、一般化したりするものではない。それは関係のうちに、人間を変革する力の不確実な可能性を示すものだけであるからだ。

IV 結語

本稿を通じて、世界との関係を促す経験と世界の諸事象・現象を秩序づける経験知の間の境界に触れた。統合経験は知識の獲得と検証を目指し、内部へと秩序化、同質化する。その経験を通じて、人間は知性をもった存在として育成され、そして規範、規則、内部の掟と秩序によって、緊張した関係を鎮め、穏和で、有用な社会的関係、効率的な環境の利用ができるようになる。それは教育学的な意味での（主体的）人間形成である。人間が同類とともに生きるための条件でもある。そのなか、重要なのはどれだけ広く、社会に関する認識、世界に関する認識を共有できるかということである。知識・理解の共有、一定の

「逸脱経験」をめぐる

共通観念体系のもとで生活することで共同生活が可能となる。

他方、逸脱経験を通じて、社会的内部、あるいは自己という内部には存在しない他なるもの、異質的なものと出遭うことによって、当人は内部から逸脱して、その緊張を直接に生きる。そして、如何なる既存の規則を介せず、特異な関わりが生起する。内部に帰った当人はその出来事を整合性のある記述知としてではなく、不確実な逸話として語る。それは外部と関係し、生きる人間、逸脱した人間の側面を形成する。ここでは関係を一般化し、統一する要因はない。そのことから得たものは共有できないが、学習によって、教育によって得られない世界との多様な関わりの経験をもたらす。人間が自ら、直接に、無媒介的に異質的なものと関わり、自分の（知識・理解の）「支配に置こうとする」ことなくその出遭いを生きる。そのことは他人に促されて発するものではない。その特異な経験は独自の、自分なりに、なされるものである。そのゆえに、共有することは不可能である。今まで一般化可能性や共有可能性を追求してきた発達論や教育(科)学の視点からして、それは論議の対象になれない。しかし、それら諸学問がそれほど人間の自主性を唱えながら、教育による人間形成にしか目を向けず、人間形成における各個人の特異の役割を認めないことは背反しているように見受ける。

逸脱経験は秩序に閉ざされた世界認識を拓がり、ときには発展の可能性さえほのめかす。世界を別様に語ることの可能性、世界に開いた関わりの可能性を。微生物学実験の常識では、異種菌による汚染は培養の失敗を意味する。しかし、Fleming 博士はあおかびに汚染された連鎖球菌の培養の箱を「失敗」として排除したならば、最初の抗生物質は発見されなかっただろう（1928年、ペニシリンの発見）。それはまさに微生物学の「逸話」である。

人間が世界に対してもつ認識は誤謬の修正の連続である。昨日の真理は今日の迷信であるように、今日の確実性は明日の妄想となるかもしれない。

註

¹ 本稿において、「知識」と呼ぶのは秩序ある調和的關係によって組織された世界認識及び世界了解の統一体系のことである。その下位に位置する理論的知識、技能、社会規範を包括するような概念として規定する。

² 「経験する当人」を以下の論述で、便宜上「当人」として省略して記す。

³ Jacques Derrida, *Force de loi—Le «Fondement mystique de l'autorité»*, Galilée, 1994. 尚、参照箇所は 37 頁: «Une *expérience* est une traversée, comme son nom l'indique, elle passe au travers et voyage vers une destination pour laquelle elle trouve le passage. L'*expérience* trouve son passage, elle est possible». 斜体は著者。本稿で記載した訳は筆者によるもの。

⁴ 金田一京助編、『新明解国語辞典』第二版、三省堂、1979 年、「貫く」の項。

⁵ この引用の邦訳版（『法の力』、堅田研一訳、法政大学出版局、1999 年、38 頁）では *traversée* を「横断」と *passer au travers* を「横切る」と訳されている。そのように訳す場合、内部・外部の構造が、同質的な空間の中の単なる移動にすりかえられることになり、何の横断であって、何を横切るのかは読み取られない。さらに、著者が指摘する *expérience* の原義と無縁であるため、訳を改めた。

⁶ 経験の可能性とはここで、目的地に辿り着く可能性（即ち確率）ではなく、可能な方向の多様性のことを指す。

⁷ 正確に言えば「遊び手が遊ぶときにした経験」である。なぜなら経験を経験として規定するのは当人に依存すると同じように、遊びを遊びとして規定するのは遊び手に依存するからである。

⁸ 例えば R. Caillois、『遊びと人間』、講談社、G. Bateson、『精神の生態学』、思索社、西村清和、『遊びの現象学』、勁草書房、などが挙げられる。

⁹ E.H. Gombrich、『樺馬考——イメージの解説』、二見史郎、谷川渥、横山勝弘訳、勁草書房、1988 年を参考した。

¹⁰ 『世界大百科事典』、日立デジタル平凡社、CDROM 版、1998 年。

¹¹ 『岩波哲学・思想事典』、廣松渉 他編、岩波書店、1988 年、「経験」の項、傍点は筆者。

¹² 『哲学の木』、永井均 他編、講談社、2002 年、「経験」の項、傍点は筆者。

¹³ 池田久美子、「『はいまわる経験主義』の再評価——知識生長過程におけるアブダクションの理論」、教育哲学研究、第 44 卷、1981 年、18～33 頁。

¹⁴ 傍点は筆者による。

¹⁵ 池田久美子、前掲稿、21 頁。傍点は筆者による。

¹⁶ 池田久美子、前掲稿、31 頁。〔 〕内は筆者による。

¹⁷ 池田氏の論文では、「ぼく」は「くすり屋」になったきっかけとして、父親が今病気で、家に薬品の瓶などがたくさんあるということであった。尚、氏は明記していないが、引用された作文の文体からして、対象は小学生の低学年の児童であると推定される。

¹⁸ «...on enseigne des certitudes, mais on enseigne jamais —ce qui est un problème fondamental— à affronter l'incertitude.» (Edgar Morin, *Ethique, science de l'homme et éducation, Chemins de formation au fil du temps*, No5, 2003, p.106)。訳は筆者による。